

## 特攻隊 II

坂井三郎さんは、「大空のサムライ」から、10冊の著書を著している。その中には当時の海軍に批判的な部分も多いのであるが、この稿では、「特攻隊」に関する話をまとめてみる。

米軍がフィリピンのレイテ湾にとつつくと、大本営は「レイテ湾に進攻した敵主力に対し、空、海のみならず、地上軍をも指向し、ここに国軍の総決戦」を発動。との大方針を打ち出し、「捷一号作戦」を発動、この時に編成されたのが神風（しんふう）特別攻撃隊である。

昭和19年10月21日、比島（フィリピン）において開始されて以来、終戦直前まで継続された神風特別攻撃隊の実態に関しては、私（坂井）なりに特別な関心を持ち続け、長年にわたって生存者の体験聴取や調査を続けているが、多くの歴史的な出来事がそうであるように、特攻もまた、それぞれの視点によって感慨や見解もさまざまである。

この作戦を決行するにあたり、大西第一航空艦隊司令長官の意をうけた201空副長玉井中佐は、さっそく人選にとりかかっている。

最初に中佐の頭に浮かんだのは、先に自分が手塩にかけて育てたと自負する第十期甲飛出身の戦闘機パイロットが指揮下にいるということであった。そこで中佐は十期生の総員集合を命じ、戦局の危機を説明し、大西長官の決意を表明したところ、「彼らは感激し、全員が諸手を挙げて賛成した。」————

戦後発刊された特攻に関する記事では、このことを強調するものが多い。しかし、実際にこの日、この時、その場に整列させられ、特攻要員と指名されながらも体当たり命中の機会を得ずに生き残った複数の十期生たちから私が直接聞きとったことと対比すると、大分内容は違うように思われる。（中略）中佐は、「もう艦爆や艦攻では間に合わん、零戦に250キロ爆弾を積んで急降下爆撃を行う。（中略）60～70度の角度で突っ込んでOPL照準器で照準すれば命中する。それも800メートルで落とすより、500メートルのほうが命中率はよい。300メートルならもっとよく当たる。200メートルならもっと確実だ。絶対に命中させるには、どうすればよいと思うか」……この時点では、兵士たちには、皆わかっている。

中佐は、鉛筆を爆弾に仕立てて、床に突きさしていった。「こうすれば命中するじゃないか。今ここでとは言わない。我こそはと思う者は、今晚中に私のところに願書を差し出すがよい！」……（ここまで言われたら、これは命令に等しい）

及川古志郎軍令部長は、「この作戦の実行に当たっては、決して命令してはならない。本人の自発的な意志によって行なうよう」と指示したと言われている。この言葉を正しく解釈すると、自発的な志願者が出ない場合は行なってはならない、

行なう必要は無いということである。

(中略) 玉井中佐がこれを行なう必要ありと考えたとするならば、なぜ私が先頭に立って出撃すると決心のほどを示さなかったのであろうか。

志願せざるを得ない状況に追い込んで志願させるのは、これは完全な命令である。軍隊というのはそのようなところであった。

関行男大尉も艦爆操縦者としては優秀であったと言われるが、戦闘機パイロットとしての優秀な技倆を要求するのは、まだ無理があった。いわば、戦力的には部下から尊敬される立場にはなく、201 空の士官としては新任、しかも新婚間も無い人とあっては、この人選に当たった玉井中佐はじめ上司の人間性を疑いたくなる感をもつのは、私一人であらうか。

はじめから体当たりを敢行する前に、物事には手順があったはずである。(つまり、玉井中佐、または、もっとも近い士官を選んで必中の超低空降爆をやってみるべきだった。これも危険だが、生還する可能性は0ではない。体当たり攻撃は決死隊ではなく、必死隊で生還の見込みはない。その手順を踏まないのは、破天荒にすぎた、というのである。)

当時、必死の特攻攻撃が実施されたことによって、全軍の士気が高揚したと軍上層部が発表したのが、決してそうではなかった。非人道的暴挙が歓迎されるはずがない。

特攻は、日常化への道を踏み出し、狂気となって特別攻撃を命じ続けた玉井中佐は、エンジン不調で帰投した准士官搭乗員を隊員の面前で罵倒し、特攻機の誘導機であり戦果確認機として出撃した特務士官に対し、「なぜ帰って来た。なぜ死ななかつた。」と迫ったとも聞いている。(筆者註：こうなれば狂っている。それでも、戦後まで生き延びている。これが気に食わない。)

もともと、このような体当たり攻撃といった作戦は、一つの奇襲であって、奇を衒う、敵側の思いもかけない攻撃法である。

はじめの何回かは成功するが、わが方とは、その数、その装備においても桁違いの戦力を有するアメリカ側は、ただちに対抗策を講じ、これを巧みに阻止したため、その効果のほどはその犠牲の数とは反比例していたが、それにしても、戦績を望めないこのような無茶無謀ともいえる出撃を、10ヶ月も強行したことは問題である。

(結局大西中将もあきらめ、「我々は比島に残って、最後まで戦う」訣別の訓示を述べて別れた大西長官をはじめ、幕僚その他の特攻の指揮官たちは、再編成のため搭乗員たちが台湾に着陸したところ、何と一足先にもうお着きであったということだ。)

あるいは、航艦の参謀として勤務していた少佐が、ある大佐に向かって「沖縄

作戦もなかなか思うようにいかず、大変なことになってきました。それにつけても毎日毎日特攻機を出さなければならない。これには、心が痛みます」坂井さんは、少し離れたところでポーカーフェイスで聞くともなく聞いていたが、この大佐が、「貴様、そんな気の弱いことでどうするか。囲碁にも捨て石、将棋にも捨て駒という手がある。そんなことで貴様あ、一人前の戦争屋になれるか！」と喚いたので、坂井さんはカッと燃えたという。いざという時には、非情にも捨て駒を使わなければ、作戦計画が立てられない場合もあることは理解できる。しかし、このことは兵の前では絶対に口外してはならないことではないだろうか、ともいう。

必死の特攻体当たり攻撃命令を受け、生涯最後の地面を離れ、眈を決して攻撃目標目指して飛行を続ける愛機の操縦席で、搭乗員は何を考えていただろうか。「このような惨い命令を受け、体当たり攻撃に行く身となるのだったら、搭乗員になるのではなかった」と後悔したであろうか。

これはよく聞かれることだが、私は決してそのようなことは考えなかったと断言できる。

勇士たちは、多くの俊英のなかから選び抜かれて勝ち取った飛行機乗りの道を最高の誇りと思っていたからである。海軍の搭乗員という誇りはそれほど強かであった。

これは坂井さん自身が、この特攻作戦の4ヶ月前に、硫黄島から飛び立って敵機動部隊をみつけて、体当たり攻撃をし、帰ってくるな、と命令をうけた。結局このときには敵がみつからなかったもので、やむなく硫黄島に戻ったのだが、このときの経験から語っておられる。

特攻を研究していた元アメリカ士官によれば、この硫黄島から飛び立った坂井さんらに対する命令が、組織立った特攻命令の嚆矢だったという。

門田隆将氏の「太平洋戦争 最後の証言。三部作」の第一巻が零戦・特攻編である。……引用させてもらう。

序文に書かれているのが、大正生まれの男子は1348万人。うち、およそ200万人が戦死している。7人に1人である。子孫も残さないまま、多くが何も語らないまま死んでいった。

生き残った大正生まれの青年たちは、亡き戦友の無念を胸に戦後がむしゃらに働き、世界から「奇跡の復興」と呼ばれる経済成長の中核を担った。

戦争とは何だろうか。「兵たちの周囲で起こった極めて身近な出来事の集積だ」と思っている。

私は、個人の「体験」に耳を傾け続けた。

それは、気の遠くなるような年月を経た出来事なのに、ご高齢とは思えない驚くべき詳細な記憶によって、私の目の前で次々と再現されていった。

その証言に触れながら、私は「人は二度死ぬ」という言葉を思い出していた。人の死は二度あり、一度目は文字通りの“肉体の死”であり、そのあと人の心の中で生き続け、二度目は誰からも忘れ去られた時に、今度は、“永遠の死”を迎えるというものである。

あの戦争で、非業の死を遂げた 200 万人を超える兵士たちは、果たして、今も人々の記憶にとどまっているのだろうか。

ご高齢にもかかわらず、必死で日本の後輩に自分の体験を託そうとする熱い思いの元兵士の証言に報いるためと、過去を軽んずる世の中の風潮。さまざまな思いを呑み込んで死んでいった戦友たちになり代わって、必死に証言してくれた老兵たちの真実に少しでも耳を傾け、今後の歴史に対する見方の一助となれば、筆者としてこれに過ぐる喜びはない。 2011 年夏

90 歳になるのに、記憶が細部に至るまで鮮明である。そしてすべての人に共通しているのは、とくに特攻隊の生き残りの人々は、自分だけ生き残ってしまった、と忸怩たる思いを持っておられることである。20 歳になるやならざるやの人々の思い出を語るのが自分の仕事でもあるかのように、語るのである。

真珠湾では、「空母加賀の岡田艦長が、部下の戦死の報に思わず涙を流されたのが印象的です。心の温かい艦長でした。あの人のもとの戦えたことを誇りに思います。その岡田艦長もミッドウェーで戦死しますが・・・」

(このとき、山口多聞少将らが第三次攻撃を提言したが、無能かつ無難路線の南雲忠一は、容れなかった。その理由がふるっている。

のちミッドウェーでも大失態を演じるのだが、日米ともに、その評価は低い。もともと将の器ではなかったのだ。この参謀が源田実。真珠湾もミッドウェーも、この 2 人がぶちこわしたようなものである。)

真珠湾でいえば、一次二次と大戦果を挙げたが、戦艦用と航空機用のガソリンタンクが 100 個以上残った。山口多聞少将のみならず、第三次の“出撃準備完了”の連絡が次々と入ってきていたのに、南雲も源田も無視する。これを実行していたら、米軍は半年は機能しなくなる。なぜなら、西海岸まで戻らなければエネルギー補給ができなくなるから。・・・で、ミッドウェーで、そのおつりがくる。要するに、司令官も参謀も戦果に満足して、それ以上に攻撃すると、こちらの被害も大きくなる。・・・せつかくの勲章ももらえなくなる、と思ったかどうか。

ミッドウェーに至っては、源田など「鎧袖一触ですよ」などと深刻に考えていなかった。このときの敗因の一つは、暗号文が読まれていたことがあるが、司令

部の油断も大きいといわざるを得ない。索敵もおざなりだし、魚雷と陸上攻撃用の爆弾に付け替えて、そこに敵空母発見の報があったから、あわてて魚雷に付け替える、などといった狼狽。船上に火薬の山ができているところに、敵の爆撃機が攻撃してくる。「運命の5分間」などと言っているが、5分くらいで、付け替えなどできるはずがない。坂井三郎さんなど、“間の抜けた5分間”とまで言っている。艦船の上に零戦1機飛ばしていたら、あそこまでひどい被害にはならなかった、という。

門田氏がインタビューした生き残りの兵が語る「とにかく、あれは源田参謀と南雲長官の責任です。特に源田参謀ですね。戦後、私は山本五十六司令長官が、敵が日本の艦隊へ接近してくることがわかったら、何を措いても、魚雷攻撃しかないんだから、艦攻が出て行って応戦しろ、と源田にかたく言いつけていたことを聞きました。山本長官の部下から聞いたんですよ。艦攻は、何があっても、魚雷をおろして爆弾に積み換えるのは禁止する、とまで山本長官は厳命していたことも聞きました。……それでも源田参謀は、ああいう（魚雷と爆弾の交換）指示をしてしまったんですからね。」源田は、緒戦の大勝利（といっても、米軍空母は一隻もいなかった）に、タカをくくっていたとしか思えない。

（源田の鎧袖一触に対して、山本五十六は念を入れて、そういう姿勢で作戦を立案することに対し、直接注意を喚起している。この姿勢は、海軍のみならず陸軍にも共通したもので、多くの戦士がこういうバカな参謀たちのために命をおとしている。あいつらは戦術を知らない。）

索敵にしても、海兵出身の大尉がドーントレスと交戦しながら報告をしていない。甲飛二期出身の偵察員が二次索敵に出て報告したが、発見が遅れた、と責任を負わされた。墓碑の名まえが削られていたという。最初の大尉の見落としというか、報告しなかったことは、戦後米国側兵士に尋ねたら知っていたという。それでも自衛隊で出世していた。（海軍も官僚組織になっていた。……このあたりが、坂井三郎さんが、口を極めて怒るのも無理はないところである。海軍兵学校出身の将と下士官上がりの兵との差別は露骨だった。）

山口多聞少将は、山本五十六の次の提督と目されていたが、唯一残った空母飛龍で孤軍奮闘したが、結局は撃沈され、艦とともに運命をともにした。若い連中がお供をします、といったが、これからの日米決戦を戦え、と退避させた。惜しい人材をなくしたものであるが、以下小生の意見であるが、年功序列で南雲などを司令官にせず、山口少将を抜擢しておけば、あのような無様な結果にはならなかったかも知れない。現実には、米軍のニミッツは、席次（ハンモックナンバー）は29番目の少将であったが、いきなり大将にして太平洋方面軍の司令長官に抜擢されている。

松藤大治少尉の話は既にも書いたが、日系二世でありながら、特攻を志願した。親孝行もできず、とあるが、1993年今上陛下がロスアンジェルスを訪れ、日系二世の敬老日系人の施設をご訪問されたとき、ある女性と握手された。この女性が、松藤大治のご母堂であった。この時点で、この人の子息が特攻隊員であることを知る人は周囲にいなかったはずであるが、奇縁としか言いようがない。この女性に、日本から松藤大治の友人が、出撃前に2人で語ったことをどうしても報告しなければ、と思い、気は重いがはるばる訪ねた。・・・すると、90歳を前にした女性が「男というものは、そういうもんです。」「国の大事には、男はキバツとやらにゃ。大治は立派なことをして死んだんです。そうじゃないですか」と語ったそうである。父親もひとことも恨みがましいことは言わなかったという。明治生まれで、日本人だから、と米国では差別をうけて生活してきた。その強さに圧倒されたという。

ボクが偉いなあと思うのは、美濃部正少佐の、高級参謀たちに対する強烈な皮肉である。末席に座っていた少佐は、練習機の特攻を言い出した連中に対し、烈しい叱責の中「ここにいらっしゃる方々は、みずから出撃されることはないでしょう。赤トンボ（複葉の練習機）まで出して成算があるというのなら、ここにいらっしゃる方々がそれに乗って攻撃されるといい。富士の裾野で、私が待っています。わたしの零戦一機で全部射ち落として見せます。」と言った。

岡嶋清熊少佐も、自分の隊から特攻機を一機もださず、「国賊」とまで言われた。

岩本徹夫（202機撃墜）など、戦闘機乗りは、敵機を落してこそその役割ではないか。1回の攻撃で死んでしまったら、自分の役割を果たせなくなる、と志願しなかった。

そういう人たちの声を無視して、特攻は続けられた。戦後、命令だけ下して自らは生き残った連中が老醜を曝してあの戦争をどうのこうのという。なくなられた英霊に申し訳ないとは思わないのだろうか。

偉い人もいる。杉山陸軍元帥夫人は、「あなたは責任をとらなくてもいいのですか」と自決を促し、見届けてから、自害した。

中島正少佐のいる空港に不時着すると、次の特攻に駆り出されるから、蛇蝎の如くきらわれていた。みんな、できるだけ中島少佐のいる空港は避けていた。戦後、零戦の会に出席したとき、「よくまあ、来られたものだ」という声が聞こえるが、「命令だったんだよ」と答えている。つまり、当初の、「本人の意思を尊重してくださいよ。命令はいけませんよ」という約束はすでになくなった。そこまで日本軍は追い詰められていたのである。